

改大友豊後侍従義統四番は島津兵庫頭義弘毛利壹岐
守吉成高橋九郎直次秋月三郎種長伊藤民部少輔祐慶島
津又七郎五番は福島左衛門大夫正則戸田民部少輔長
曾我部土佐守元親六番は蜂須賀阿波守家波生駒雅樂
頭近則七番は小早川左衛門佐隆景立花左近将監宗茂
毛利久留米侍従秀色高橋主膳正統筑紫上野又廣門八
番は毛利安藝宰相輝元吉川侍従廣家等なり 此外對州
者も附けたる名前も数負あり船平は九鬼大隅守嘉隆藤堂
佐渡守高席殿坂中務少輔安治加藤左馬助嘉明久留島出
雲守管平右衛門素山藤太同小傳次堀内安房守杉善傳三

郎等なり七人の横目の内垣見和泉守一直福原右馬助熊谷
内藏助森伊勢守新庄新三郎と相附りし早く朝鮮一渡
海らぐき旨命せし壬辰三月朔日先陣小西攝津守行長
ら一卒の勢打立ちし加藤主計頭清正と始りて毎日
も切らば發向せし太閤も將に筑紫一赴りし群臣心
附て曰君名護屋よりまさむ時大明朝鮮より書翰を奉
らむ小文才有る人を召連られて可なりむ若し然らざる
時ハ書翰来る時よいついぞ其意旨を知る事を得んと秀
吉の給く吾大明朝鮮は其國の文字と拙たせ悉く吾國の
以呂波と知りしは何の難き事やあらん豈學生と携む

やと有ありのば群臣ぐんしんも又また云いふ事ことを得えたるるのの後のちに思おもひ
 翻かえりしむむ南なん禪ぜん寺じの僧そう靈りやう三さん東とう福ふく寺じの僧そう永えい哲てつ相さう國こく寺じの僧そう
 兼かね允いんと招まねき連つらられ斯しかて三月さんげつ二十六にじゅうろくにん日にち小こ秀しゆ吉きち京きやう都とと進しん發はつ
 あありて程ほどなく肥ひ前ぜんの名な護ご屋や唐津云今いま云いふ著ある陣ぢん有あるる總そうて名な
 護ご屋やは在ある陣ぢんの人ひと々々ハ東とう照しやう大だい君きん大だい和わ中ちゆう納なつ言げん秀しゆ俊しゆん加か賀が宰さい
 相さう前ぜん田でん利り家け越えつ前ぜん少せう將しやう德とく川せん秀しゆ康かう公こう織お田でん信しん雄ゆう入に道だう常じやう真しん越えつ後ご
 宰さい相さう上じやう才さい景けい勝しやう會かい津しん少せう將しやう蒲ふ生せい氏し郷きやう津しん少せう將しやう織お田でん信しん兼かね佐さ竹ちく右う
 京きやう大だい夫ふう義ぎ宣げん出しつ羽う侍し從じゆう最さい上じやう義ぎ光かう毛もう利り河か内ない守し秀しゆ賴らい森しん美み作さく守し
 忠ちゆう波は丹たん羽う五ご郎らう左さ衛ゑ門もん尉ゑい長ちやう重じゆう京きやう極ごく若わ狭せ守し高かう次じ木き下げ若わ狭せ守し勝しやう
 俊しゆん伊い達たつ陸りく奥おく守し政せい宗しゆう侍し從じゆう堀くわ秀しゆ政せい堀くわ美み作さく守し村むら上じやう周しゆう防ぼう守し溝みぞ口くち

伯はく耆し守し秀しゆ勝しやう木き下げ宮みやう内ない少せう輔ほ俊しゆん房ぼう水すい野の下げ野の守し信しん元げん青せい木き紀き伊い
 守し宇う都と宮みやう弥や三さん郎らう秋あき田でん太たい郎らう南なん部ぶ大だい膳ぜん大だい夫ふう信しん直ちゆう津しん輕けい右う京きやう亮りやう
 為ゐ信しん本ほん多た伊い勢せい守し那な須しゆ太たい郎らう真ま田でん源げん五ご朽きう木き河か内ない守し元げん信しん石せき川せん
 玄げん蕃ばん允いん仙せん石せき越えつ前ぜん守し伊い藤とう長ちやう門もん守し木き下げ右う衛ゑ門もん大だい夫ふう延えん俊しゆん乃の
 前ぜん備び八はち畠は田でん左さ近ぢん將しやう監かん金きん森しん飛ひ彈だん守し戸こ田でん武ぶ藏ざう守し蜂ほう屋ゑ大だい膳ぜん大だい
 夫ふう津しん田でん長ちやう門もん守し池ち田でん備び中ちゆう守し小せう出しつ信しん濃のう守し奥おく山さん佐さ渡だ守し上じやう田でん左さ
 太たい郎らう山さん崎さき左さ馬ま允いん稻い葉は兵へい庫こ頭とう市し橋はし下げ總そう守し昌ちやう之し赤せき松そう上じやう總そう外がい
 義ぎ佑う羽う柴さい下げ總そう守し勝しやう雅や乃の乃の鉄てつ炮ぱうの衆しゆう八はち大だい鳥ちゆう雲うん八はち木き下げ與よ
 右う衛ゑ門もん伊い藤とう弥や吉きち野の村むら肥ひ後ご守し舟ふね越えつ五ご郎らう右う衛ゑ門もん宮みやう本ほん藤とう左さ衛ゑ
 内ない橋はし本ほん伊い賀が守し生せい熊くま源げん外がい鈴しん木き孫そん之し郎らう乃の乃の近ぢん習しゆ乃の乃の六ろく組ぐみ小せう

姓の輩之祖使番輩加衆其外鷹匠中間等から後ろ備へば
 織田三七信秀長東大藏大輔古田織部正山崎右京進中江
 式部大輔蔭田權佐正時生駒修理亮同姓主殿溝口大炊助
 河尻肥前守池田弥右衛門間島彦太郎大塩與一即有馬萬
 々豊氏寺沢志摩守矢部豊後守寺西筑後守同次郎福原右
 馬助長谷川右兵衛尉竹中丹後守松岡右京進木下左京助
 秀規川勝右兵衛尉氏江志摩守同内膳正寺西庄兵衛尉部
 土佐守等名護屋在陣の軍勢合して十萬餘人から外に遊軍
 六萬餘人と備へ置る大暇ハ大國なれば幾若干の援兵の
 来りむも測り難けしハ其不虞に備へしむ為と聞えけ

去程は先陣小西攝津守行長加藤主計頭清正を始めと
 して黒田甲斐守長政小早川左衛門尉隆景毛利安藝守相
 輝元福島左衛門大夫正則以下朝鮮渡海の軍勢各々名護
 屋と發船一壹岐の勝本に到りて小風吹く海上激く
 爰小滞船有る夏十日餘も過ぎ風少吹く時
 小西行長思ひて海上若くは諸船皆發して
 未波とせしむるに列船は抽て朝鮮押渡敵
 の不意を打て高名せしと俄に夜半には潜りて解て對
 面して押出し明る午の刻には少く順風なるに
 對州豊崎に著船し列船の諸將ハ小西の船を見えざる

一 鷲島各々行長は出脱したるを安らぐねと清心と
 始黒田長政福島正則以下の諸船悉く押出し既五六里
 も行処は俄に逆風となり通船叶はず各々の勝本は吹
 戻れり小西は列船は先立ち豊崎は到りてのど逆風
 けり吹くのは如何とせしと案ト居たる處は空の氣
 色妙一のりて見えしは豊崎を押し對馬守義智先
 導有松浦有馬大村五島の諸將と同く蒼海の逆風と志
 のに難なく朝鮮の海口釜山浦に着き急ぎ釜山城と
 攻む此城大平八壕深く石壁高く構へたれど後ろの高
 山の峻岨と頼るは浅回たるを俄見て日本勢後ろの山

よ分け登りてさうと數百挺の鉄砲を打つけしは城兵
 崩せ立ち即時は落城し及びく夫とを勢と分け西平浦
 多太浦の城と攻むるは何れも本もなく落城し爰は於て
 行長諸卒は向いて云く諸士の奮戦もさるはた然せば
 馬の鞍とし衣帯とも後一人馬の勞も休むべきならん
 考る小釜山の落城と聞き東萊の守を密にらんも攻
 落し事容易くもや此勢は乘り東萊を踏
 破つて勇名と外國に奮ひ大同の御感も預らんは如何
 かと有るは諸士皆一同小勇に進むて同意せし然ら
 ば用意とぐりて同十五日早天は日本勢進むて東萊を

押寄せ民屋を打破り城をむくくと取圍ひ息をつせび攻
 るるに俟て半日許りて落城の城兵散るに逃去ると日
 本勢急に追掛け首を斬る莫若干級なり同夜兵士等梁山
 城に到り鉄炮を打ち懸くれば城兵盡く遁れ去り梁山も輒
 く攻取らる又密陽の城兵どもを龍院の險阻と要害より
 て防ぎしれど日本勢高山と莫ともせび攻登る勢は怖れ
 て守兵一度崩れ密陽も歸り城は火を懸く皆散るに落
 行くれば密陽も本を濡さば落城の蘓山驛も朝鮮人陣と
 取らるる是も堪へば蔚山の兵營も逃入り其夜右往左往
 に逃去る日本勢追て金海に到り急に攻て是を拔きしるる

一説黒田長政攻
 取らるるといつて小西等密陽より清道大丘仁岡善山を
 経て四月二十四日尚州に到り行長前面を攻め宗義智後
 面を攻む松浦有馬大村五島左右を夾み撃つ朝鮮人大に
 敗るる

朝鮮 四月十三日

明萬曆二十年壬辰

是日

日本船對馬の方より海を

敵へ出来る遙よりこれを見れば其船數限りたり金山僉使

僉節制度使と云畧し鄭機出で絶影島釜山浦の南面より有
 て僉使と云位階三名眞機出で絶影島釜山浦の南面より有
 朝鮮三郎義秀の靈社有る琉球國の鎮西八郎為朝と勸
 請せる謂れハ普く世の知れる所あり朝鮮國ハ朝縮の靈
 社有るを奇し云一時的に崇めある由りて土人畏敬せり
 伏て惟れハ女直奴見干の源廷尉の故事等何れも我日本
 の武勇の然らば一獵しけるが狼狽て城に入ることなく日本
 兵は所をすべし

勢つゝ至陸上四面より雲霞の如く攻寄せらるる
 の時刻を移さば城陷るる左水使兼郡の水營に居り位
 階三 朴泓ハ敵軍の大勢たるを見て殺て兵を出さば城を
 棄て逃げ去るぬ日本勢ハ兵を分て西平浦多大浦と陥い
 る多太の僉使尹興信力戦して殺され左兵使左馬節度
 兵營に居り 李珣ハ此消息を聞て兵營より東萊に入らば
 金山陥ると聞き大き小恒を身の措き所と失ひ城外に出
 て犄角の勢いとらんし託て東萊の城と出退て蘇山駅
 陣ハ東萊府使宋象賢ハ李珣と引留て小同く此城
 と守らむし云へし李珣とてがが同十五日日本勢進

わで東萊の攻来る宋象賢城の南門に登りしりく戦ひ
 半日ありて城陷る象賢墜座して又と受て死に日本人
 其死を以て城を守りたるを嘉し棺槨を作し尸を斂り城
 外に埋り標を立て以てこれを識は是に於て郡縣風を望
 むて奔り濱州密陽の府使朴晉ハ東萊より奔り還り鵲院
 の隘路を阻り以てこれを禦がんとし日本勢梁山と陥
 り鵲院に至り小朴晉を守りての兵有ると見て山の後ろ
 より高きに登り蟻の附か如く山野は漫々攻寄る隘路
 を守り者どもこれを望み見て皆散らばなりければ朴晉
 も馳て密陽を還り大と候て軍器倉庫と焚拂ひ城を棄て

山に入ると李瑋は奔るに兵營を還り先づ其妻と捕りて
 城中海を以て驍騎立ち軍卒一夜の内は四五
 度も動乱し李瑋は其曉獨身少て遁れ去りけしが衆
 軍大崩れ成て落城せし日本勢は道と分け長驅し
 連る諸邑を陥れし一人も敢て拒ぐ者なし金海の
 府使徐礼元は城門を閉て堅く守りし日本勢城外の麥
 禾を刈りて壕と填みたるが頃刻の間は城と齊しくなり
 ぬ里田長攻押寄城外野辺の麥を刈り取て積めやくと下
 暫時の間は積上げて目前は山となり我れ程に
 攻め入りて忽ち落城しと云り因て日本勢城を
 攻登る州溪の郡守李某一番は遁れ去る徐礼元も迷いて

出けし城遂に陥るぬ巡察使金暉は初め晋州にて寢を
 聞き馳て東萊に向りし中路に至りし日本勢攻近づ
 くと聞きて前む夏能く引還りて右道をきりて走り
 くるの為づき方なく但諸郡邑檄文を廻し人民を諭し敵
 と避さむ是より由て道内道尚皆空けしを愈く敵を禦ぐ
 夏ハ成らざるけり
 龍宮の縣監位階禹伏龍邑軍を領して兵營を赴き永川の
 路邊にて食事して居たる時河陽縣の軍兵數百人防禦
 使は属て上道に向て其前と過行けり禹伏龍河陽の軍士
 の馬より下らばると怒りてこれを拘りて謀殺せしむる

210.4
2

と以て責むるに河陽の軍兵より兵使の公文と出して大
 れと示し其言ひゆけと一々馬伏龍已が軍兵と目とむ
 せりて取圍むがこれと殺し皆ごとく其尸を積むる
 野に滿るる巡察使と功なることとて言上りければ馬
 伏龍位階と進められ通政となす鄭熙績と云る者も代り
 て安東の府使位階 三名となすの後は河陽縣の人民孤兒寡妻
 離るるの使臣の来るごとく其馬の首と遮つて冤つと
 つたふ辨辨きけきごとく馬伏龍の時代は名ある者なりけ
 れ誰有て其非法と申ひ者なりけり

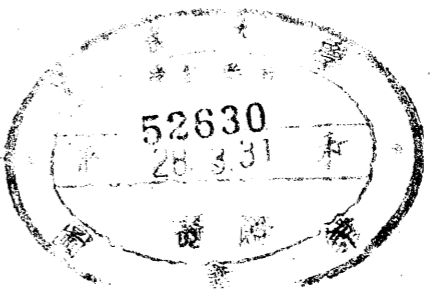
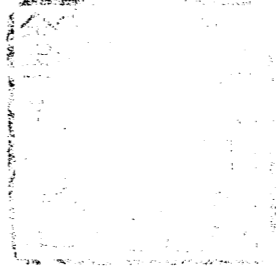
朝鮮征討始末記卷之一終

正
實
朝鮮征討始末記

二

210.4
3

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 7



朝鮮征討始末記卷之二

對州 山崎尚長 輯
村一善 校

加藤清正攻落慶州城并秀家朝鮮渡海之事

日本加藤主計頭清正ハ小西行長ヲ出シ脱ト先陣トシ

越々支無念ト思ヒ釜山浦一說 熊川ニ着岸シ此ト行長

ノ過シ路と涉ハ本意ナクバトケ釜山浦トシ三里奥

ノ慶州ト云處ニ押寄せ民屋トキキヨクハ喚キ叫ビテ攻

詰ケシハ一ト支トモ支トモトテ悉ク敗北シ清正大ニ喜

ヒ物始めト記シ你等王城と攻落トシ更進スルハ皆戰